

(20) サヤエンドウ  
ア 殺菌剤

農 薬 名	成 分 名	FRAC コード	適 用 病 害 虫 名								注 意 事 項
			う ど ん こ 病	褐 紋 病	褐 斑 病	根 腐 病	灰 色 か び 病	茎 腐 病	菌 核 病	苗 立 枯 病 R	
アフェットフロアブル	ベンチピラト <sup>®</sup>	7						未マ	未マ	未マ:【豆類(未成熟)登録】	
アミスター20フロアブル	アゾキシストロビン	11		◎				◎	◎	褐紋病に対しては薬剤耐性を認める地域もあることに注意する。	
カナメフロアブル	イピルフルキサム	7						◎	◎		
カリグリーン	炭酸水素カリウム	NC	野					野		野:【野菜類登録】	
カンタスドライフロアブル	ホスカリト <sup>®</sup>	7						◎			
ゲッター水和剤	ジエトフェンカルブ・チオファネートメチル	10・1						◎			
ケンジャフロアブル	イフエタミド <sup>®</sup>	7						◎			
サプロール乳剤	トリホリン	3	◎								
サンヨール	DBEDC	M01	◎					◎			
シグナムWDG	ピラクrostロビン・ホスカリト <sup>®</sup>	11・7	◎					◎			
スクレアフロアブル	マンデストロビン	11		◎	◎			◎	◎		
セイビアーフロアブル20	フルジタキソニル	12						◎	◎		
タチガレン液剤	ヒドロキシノキサゾール	32				◎					
トップジンM水和剤	チオファネートメチル	1		◎	◎			◎		褐紋病に対しては薬剤耐性を認める地域もあることに注意する。	
トリフミン水和剤	トリフルシゾール	3	◎								
トリフミンジェット	トリフルシゾール	3	◎								
ニマイバー水和剤	ジエトフェンカルブ・ベノミル	10・1						◎	◎		
ハーモメイト水溶剤	炭酸水素ナトリウム	NC	野					野		野:【野菜類登録】	
パレード20フロアブル	ピラジフルミド <sup>®</sup>	7		◎				◎	◎		
プロパティフロアブル	ピリオフェノン	50	◎								
ファンタジスタ顆粒水和剤	ピリベンカルブ <sup>®</sup>	11						◎	◎		
ペンコゼブフロアブル	マンゼブ <sup>®</sup>	M03		◎	◎						
ベンレート水和剤	ベノミル	1							◎		
ラリー水和剤	マイクロタニル	3	◎								

農 薬 名	成 分 名	FRAC コード	適 用 病 害 虫 名								注 意 事 項
			う	褐	褐	根	灰	茎	菌	苗	
			ど				色			立	
			ん	紋	斑	腐	か	腐	核	枯	
			こ				び			病	
			病	病	病	病	病	病	病	R	
リゾレックス水和剤	トルクロホスメチル	14						◎		◎	
ロブラール水和剤	イプロジオン	2					◎				

注) 苗立枯病の対象病原菌の表記 R: *Rhizoctonia*





(20) サヤエンドウ  
ウ 土壤消毒剤

農 薬 名	成 分 名	RAC コード I:殺虫 F:殺菌	適 用 病 害 虫 名											注 意 事 項	
			ケ ラ	ネ キ リ ム シ 類	ハ リ ガ ネ ム シ 類	セ ン チ ユ ウ 類	ネ コ ブ セ ン チ ユ ウ 類	ネ グ サ レ セ ン チ ユ ウ 類	萎 凋 病	白 絹 病	立 枯 病	苗 立 枯 病 R	根 腐 病		茎 腐 病
ガ ス タ ー ド 微 粒 剤 バ ス ア ミ ド 微 粒 剤	ガゾメット	I:8F										◎		◎	
キ ル パ ー	カーバムトリウム塩	I:8F						◎				◎	ホ		ホ:【前作のきゅうりのホモプシス根腐病蔓延防止】
ク ロ ー ル ピ ク リ ン	クロルピクリン	I:8B	◎	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎		◎		
ク ロ ピ ク 8 0 ド ジ ョ ウ ピ ク リ ン ド ロ ク ロ ー ル	クロルピクリン	I:8B		◎	◎	◎			◎	◎					
ク ロ ル ピ ク リ ン 錠 剤	クロルピクリン	I:8B				◎		◎	◎	◎					
ク ロ ピ ク テ ー ブ	クロルピクリン	I:8B						◎					◎		
テ ロ ン D C 油 剤 D ー D	D-D	I:8A					未マ	未マ							未マ:【豆類(未成熟)登録】

注) 苗立枯病の対象病原菌の表記 R:Rhizoctonia

(20) サヤエンドウ  
エ 残渣処理剤

農 薬 名	成 分 名	I R A C コ ー ド	使用目的	注 意 事 項
キルパー	カーバムトリアム塩	8F	前作のいちごの <sup>ネ</sup> ガセ <sup>ニ</sup> チュウ <sup>ユ</sup> 蔓延防止	使用目的以外での 使用不可
			前作のきゅうりの <sup>コ</sup> ジ <sup>ラ</sup> ミ類蔓延防止	
			前作のきゅうりの <sup>ツ</sup> る <sup>枯</sup> 病蔓延防止	
			前作のきゅうりの <sup>ト</sup> シ <sup>根</sup> 腐病蔓延防止	
			前作のきゅうりの <sup>ト</sup> シ <sup>根</sup> 腐病の蔓延防止	
			前作のトマト、ミニトマト、ピーマン、とうがらし類又はきゅうりの <sup>ネ</sup> ガセ <sup>ニ</sup> チュウ <sup>ユ</sup> 蔓延防止	
			前作のトマトの <sup>ハ</sup> ク <sup>サ</sup> イ <sup>ダ</sup> ニ蔓延防止	
			前作のトマト又はミニトマトの <sup>コ</sup> ジ <sup>ラ</sup> ミ類蔓延防止	
			前作のトルコキョウの <sup>シ</sup> マ <sup>シ</sup> マ <sup>シ</sup> 病蔓延防止	
			前作のなすの <sup>ア</sup> サ <sup>リ</sup> ム立枯病の蔓延防止	
			前作のにんにくの <sup>イ</sup> ガ <sup>セ</sup> ニ <sup>チュウ</sup> ユ蔓延防止	
			前作のねぎの作物残渣に寄生した <sup>ク</sup> ロ <sup>ハ</sup> ネ <sup>ノ</sup> コ <sup>ハ</sup> エ類蔓延防止	
			前作の野菜類又は花き類・観葉植物の <sup>ア</sup> サ <sup>リ</sup> ム類蔓延防止	
			前作の野菜類又は花き類・観葉植物の古株枯死	

## オ 病害虫防除法（サヤエンドウ）

### （ア）うどんこ病 *Erysiphe pisi*

#### （防除のねらい）

分生孢子または菌糸の形で越冬する。スナップエンドウにおいては「ごま症」の原因となる。発病初期からの殺菌剤散布はその後の発病を抑制するが、散布を怠ると収穫節位まで急激に進展するので防除開始時期を逃さないようにする。着花～収穫初期に下葉の裏側から発病するので注意深く観察する。

#### （耕種的防除法）

- （１）罹病株は集めて処分する。
- （２）密植を避け、通風をよくする。
- （３）窒素過多を避け、リン酸、カリ肥料を十分に施す。

### （イ）褐紋病 *Mycosphaerella pinodes*

#### （防除のねらい）

病原菌は菌糸または孢子の形で種子あるいは被害植物体上に残り、伝染源となる。本病の防除は種子消毒を実施する。本病はミカンそばかす病の原因にもなる。

#### （耕種的防除法）

- （１）健全株から採種する。
- （２）排水不良の湿地や重粘土地の栽培を避ける。
- （３）連作を避ける。

### （ウ）褐斑病 *Ascochyta pisi*

#### （防除のねらい）

柄子殻、柄孢子および菌糸の形で、種子または被害植物で生存している。早春から発生し、4月から収穫終わりまで進展する。この時期の雨は発生を助長する。発病初期から定期的に薬剤散布する。

#### （耕種的防除法）

- （１）健全株から採種する。
- （２）排水不良の湿地や重粘土地の栽培を避ける。
- （３）連作を避ける。

### （エ）菌核病 *Sclerotinia sclerotiorum*

#### （防除のねらい）

被害部に生ずる菌核で越年し、春と秋に子のう盤を生じ、子のう孢子が飛散して発病する。曇雨天の多いときに発生しやすい。本病は輸送中や店頭でも発病するので、被害さやは一丁取り取り除く。

#### （耕種的防除法）

- （１）発病株は見つけ次第抜き取り処分する。
- （２）陽熱消毒を行う。
- （３）排水と風通しをよくする。

### （オ）茎腐病 *Thanatephorus cucumeris* (*Rhizoctonia solani*)

#### （防除のねらい）

土壌中の罹病組織内で菌糸あるいは菌核で生存し、伝染源となる。風雨による地際部の傷や寒害は発病を助長する。

#### （耕種的防除法）

- （１）発病地は連作を避ける。
- （２）発病株は早目に抜き取り処分する。

### （カ）立枯病 *Fusarium arthrosporioides*, *F.anguioides*, *F.sporotrichioides*

#### （防除のねらい）

病原菌は被害植物とともに土壌中に残り伝染源となるので、連作年数が長いほど発生しやすい。気温が高いほど被害も多く、生育初期と生育末期に目立つ。発病時期になってからの薬剤防除は困難なので、効果的な土壌消毒と耕種的防除に重点を置く。

#### (耕種的防除法)

- (1) 発病地は連作を避ける。
- (2) 収穫後は早目に株を抜き取り処分する。

#### (キ) 苗立枯病 *Rhizoctonia solani*, *Pythium debaryanum*

##### (防除のねらい)

病原菌は土壌伝染性で、播種後から幼苗期にかけて発生し、地際部が水浸状になる。越冬は被害植物の菌糸である。排水不良、冠水のときに発生しやすい。

##### (耕種的防除法)

- (1) 発病地は連作を避ける。
- (2) 高畦栽培やマルチ栽培をする。地温上昇抑制効果のあるマルチは出芽率の向上が期待できる。

#### (ク) アファノミセス根腐病 *Aphanomyces euteiches*

##### (防除のねらい)

粘土質で排水の悪いほ場に多発しやすく、浸冠水による病原菌の流入によっても多発することがある。発病株は急激に根腐れを起こし、幼植物では枯死するが、生育後の病状は黄変枯死が多くなる。早播きでは初期の生育阻害が大きく、普通播きでは翌春の枯れ上がりを助長する。病原菌は土壌中で長期間生存し、連作すると発生が多くなる。

##### (耕種的防除法)

- (1) 発病地は連作を避ける。
- (2) 高畦栽培やマルチ栽培をする。
- (3) 有機物を施用し、深耕する。

#### (ケ) 灰色かび病 *Botrytis cinerea*

##### (防除のねらい)

雨の多い年に発生が多く、水田裏作や排水不良なほ場に栽培したときやハウス栽培での発生が多い。ハウスでは換気を図り、発病初期に薬剤を散布する。

##### (耕種的防除法)

- (1) 密植を避け、排水通風をよくする。
- (2) 被害さや、被害茎葉を除去し、ほ場を清潔に保つ。

#### (コ) モザイク病 BBWV, BYMV, PSbMV, WCMV, PnMV, WMV, CMV, LMV

##### (防除のねらい)

主な病原ウイルスはソラマメウィルトウイルス (BBWV) とインゲン黄斑モザイクウイルス (BYMV) であり、アブラムシ類によって非永続的伝染をする。その他、エンドウ種子伝染モザイクウイルス (PSbMV)、シロクロバーモザイクウイルス (WCMV)、ラッカセイ斑紋ウイルス (PnMV)、カボチャモザイクウイルス (WMV)、キュウリモザイクウイルス (CMV)、レタスモザイクウイルス (LMV) がある。いずれも汁液伝染し、ほとんどのウイルスはアブラムシによって媒介される。

##### (耕種的防除法)

- (1) 発病株の早期除去に努める。
- (2) ほ場周辺の雑草を除去する。
- (3) 光反射性資材をマルチとして利用することでアブラムシ類の侵入を防ぐ。

#### (サ) こうがいかび病 (こうがい毛かび病) *Choanephora cucurbitarum*

##### (防除のねらい)

早播きで発生し、7～9月に多い。薬剤効果が出にくいので、耐病性品種を選び、早播きを避ける。



**(シ) アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ, ハナアザミウマ)**

**(防除のねらい)**

春から秋にかけて開花後の花に多く見られる。加害を受けたさやは「白ぶくれ症」と呼ばれる症状を呈する。卵は植物の組織の中に生まれ、幼虫は薬剤が到達しにくい花の中に生息するため、薬剤散布だけでは防除効果が十分でない。周辺雑草から成虫が飛来すると考えられるため、ほ場周辺の発生源となる雑草の除去や光反射性資材のマルチ利用等、初期の侵入防止を図る。

**(耕種的防除法)**

- (1) ほ場周辺の雑草を除去する。
- (2) 光反射性資材をマルチとして利用することで虫の侵入を防ぐ。

**(ス) コナジラミ類**

**(防除のねらい)**

すす病の発生による汚れが問題となる。近年は本種による甚大な被害は見られないが、8～9月に乾燥した場合には多発する傾向が見られるため、気象条件を考慮しながら発生に注意する。キュウリのオンシツコナジラミの項、トマトのタバココナジラミの項参照。

**(セ) アブラムシ類**

**(防除のねらい)**

モザイク病を媒介する。また、春季に気温が高くなると急増し、多発すると結実を阻害するので、発生を確認したら直ちに防除を行う。

**(耕種的防除法)**

- (1) ほ場周辺の雑草を除去する。
- (2) 光反射性資材をマルチとして利用することで虫の侵入を防ぐ。

**(ソ) ウラナミシジミ**

**(防除のねらい)**

年内取りのエンドウに被害が大きい。防除は開花と同時に始め、産卵が少なくなる12月初め頃まで続ける。幼虫がさやへ食入するのを防ぐため、発生初期の防除に努める。

**(タ) ネキリムシ類**

**(防除のねらい)**

ナスの項参照。

**(チ) ヨトウムシ (ヨトウガ)**

**(防除のねらい)**

春と秋の年2回発生するが、春の発生は比較的少ない。ハスモンヨトウと同様、若齢幼虫は集団で葉裏を加害し、大きくなると分散する。幼虫の発育が進むと防除効果が劣るため、幼虫の若齢期に防除を図る。

**(ツ) シロイチモジヨトウ**

**(防除のねらい)**

被害は8～10月にかけて多い。生育初期の比較的草丈の低いものへの産卵が多いため発芽直後から発生に注意する。幼虫は芯葉をつづり、薬剤の到達しにくい場所に生息するため、薬剤散布は丁寧に行う。

**(耕種的防除法)**

播種後、生育初期まで寒冷紗で被覆すると、産卵防止に役立つ。

**(テ) ハスモンヨトウ**

**(防除のねらい)**

8～10月にかけてシロイチモジヨトウと混発することが多い。若齢幼虫は集団加害するので葉が白変し、透けて見える。白変葉の発生を目安に防除を行う。幼虫の発育が進むと防除効果が劣るので、幼虫の若齢期に防除を図る。

**(ト) ハモグリバエ類 (ナモグリバエ, マメハモグリバエ)**

**(防除のねらい)**

栽培初期 (秋) にはマメハモグリバエが優占するが、気温の低下とともにナモグリバエが優占してくる。両種とも多寄主範囲が広く、豆類ではエンドウを好んで加害する。県南部では冬季でも被害が出るが、春先になると急激に増加する。被害を抑えるには定期的に薬剤を散布する。卵と幼虫の若齢期に防除を図る。

**(ナ) ダイズクキモグリバエ**

**(防除のねらい)**

早播きエンドウの生育初期に加害し、多発時には被害茎を枯死させることもある。乾燥期になると被害は大きくなり、生育初期に防除を図る。

**(ニ) ハダニ類**

**(防除のねらい)**

早播き栽培や暖冬の年は、周辺の雑草や他の作物で急激に増加したものが生育初期から発生することがある。生育初期に防除を図る。

**(ヌ) ウスカワマイマイ**

**(防除のねらい)**

キャベツのナメクジ・マイマイ類の項参照